

## 中國語(普通話)における

### 若干の變調規則について

零

樋 口 靖

本稿は、中國語(普通話)に存在するいわゆる“聲調”とその“變調”規則について、聊かの初歩的な考察を加えようとするものである。

#### 一

一般に、普通話の字調には、

第一聲 高く平らか調子

第二聲 上昇調

第三聲 初め低くやや上昇する

第四聲 下降調

の四種の調型があつて、この四調型を音韻論的に解釋すれば、二聲と四聲が“上昇”“*v. s.*”“下降”という點で對立し、一聲と三聲が“高”“*h. s.*”“低”という點で對立するとされる。この解釋に従うと、普通話の基本四聲調は $\times$ 型をもつてシンボライズすることができる。これを王士元(一九六七)<sup>註①</sup>が提起した聲調のための辨別的素性によつて表示すると、一聲と三聲は—contourなる素性を持ち、二聲と四聲とは+contourなる素性を持つことによつて、相互に對立し、また、一聲は+highを有し、四聲は—highを有することによつて對比され、二聲は+risingを、四聲は+fallingを持つ

ことによつて區別されることになる。すなわち、

- contour (1.3聲)		+ contour (2.4聲)	
+ high (1聲)	- high (3聲)	+ rising (2聲)	+ falling (4聲)

つまり、三聲は平らで低くおさえることをその本質とするのであつて、調値 214 において、最初にやや下降するのは平均の高さから「低」にまで移行するための、また末尾がやや上るのは、平均の高さに戻ろうとするための音聲的現象であると解釋されている。

しかし、このような解釋には若干の疑問點がないわけではない。たとえば、廣州方言の陽平調は、21 といふ調値を持つており、末尾で上昇せず「低」部を持續するが、この調値は普通話のいわゆる「半上聲」のそれとよく似ている。ところで、またこの陽平調の音節が連續して發音される場合、發音しにくいために變調を起こすということもないようである。

ma ˩ iau ˩      “麻油” ㄇㄞˊㄡˊ

従つて、普通話の三聲の末尾が平均の高さにまで戻ろうとすることが、ただちに自然な音聲的現象だ、とするについてはまだ考慮の餘地があるのではないだろうか。もちろん、このように音韻體系の異なる方言同士を、その他の條件を考慮に入れずに比較してしまうのは正當ではないであらう。特に、ここでは音節連續における強めの位置を考えに入れていない。普通話の三聲が調型 214 を見せるのは、音節連續中の最後の音節で、しかも最も強い強勢〔重音〕を受ける場合に限られるので、強きアクセントに北京語のような明瞭な型のみられない廣州やその他の方言と、そのまま比較するのは問題があると思う。

ところで、また、三聲の音節が連續する場合において、最後の音節を除き、二聲のように發音される變調を指定する時に、  
[ - high ] → [ + rising ]

のような規則を立てることになるが、このような規則は音聲的にあまり自然なものではないように思われる。従つて、三聲の基底形には、凹型を持つことがその本質であると認めて、三聲を

[+rising]  
[+falling]

とする。もちろん普通話には凸型の調値を持つ聲調は存在しないので、三聲が素性  $-convex$  を有することは餘剩的である。<sup>註③</sup>

以上の如く解釋すると、一聲は平ら調子であることにその本質があり、二聲は上昇調、四聲は下降調に、そして三聲は凹型にその本質があることになる。<sup>註④</sup> すなわち、

	一聲	二聲	三聲	四聲
rising	-	+	+	-
falling	-	-	+	+

こうすれば、前述の變調規則は、

[+falling] → [-falling]

となり、ごく無理のないものになるであらう。

## 二

普通話において最も特徴的に觀察される變調現象には、次のようなものがある。

(1) 三聲が他の三聲に先行される時、その三聲の音節は二聲に近く發音される。つまり、

三聲+三聲 → 二聲+三聲

(例) “有水”<sup>註⑤</sup> (“游水”の如く)

“起碼”（“騎馬”の如く）

“乳母”（“如母”の如く）

もし幾音節かの三聲が悠長なスピードで發音されるならば、最後の一音節はもとどり三聲に發音されるが、その他の音節はすべて二聲のように發音される。

（例）“炒米粉”（“潮米粉”の如く）

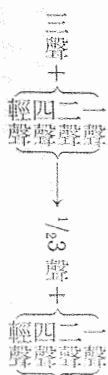
“李廠長”（“梨常長”の如く）

ここで注意して置かなければならないのは、この變調の過程が、音節連續のいかなる領域に及んでいるのかということである。このような段落は、必ずしも統辭論的言語單位と一致するとは限らないし、強め段落よりも小さな區域内でしか變調の起らないこともあり、また、變調が強め段落を超えて起ることもあるらしいが、まだ調査が十分ではない。恐らくは或る種の prosodic な單位が存在するものと推測される。そこで、ここでは一應、變調過程が及ぶ何らかの領域を假りに設定し、その領域内の發話連續のみを、變調規則が覆うものと考えておくほかはない。<sup>註④</sup>

（例）“豈有／此理”（“奇有慈理”の如く）

“我有／幾種／好板本／水滸”

（2）三聲が一聲、二聲、四聲および輕聲のいずれかの聲調によつて後續される場合、その三聲は $\frac{1}{2}$ 三聲（いわゆる半上聲）に轉ずる。すなわち、



（例）“北京”（三聲 + 一聲）

“祖國” (三聲+二聲)

“朗誦” (三聲+四聲)

“喜歡” (三聲+輕聲)

1/3聲の調値は $\nearrow 21$ である。この異音は普通話において、上記のような言語的環境にのみ現われ、三聲が轉じた所の二聲（いわゆる變上聲）と相補分布をなし、語の新しいクラスを作ることはいくつかあるけれども、音韻規則によつて $\nearrow 3$ 聲の調型を指定すべく、音聲記述が與えられるはずのものである。

變上聲および半上聲を表示する、三聲についての變調規則は、

規則 I  $\left\{ \begin{array}{l} + \text{rising} \\ + \text{falling} \end{array} \right\} \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} [- \text{falling}] / - [+ \text{rising}] \\ [- \text{rising}] / \text{other} \\ \text{high} \end{array} \right.$

この規則は所與の文について、文頭から文末へと、規則が作動しなくなるまで繰返し適用することとする。但し前にも述べたように、この規則は、或る變調領域にのみかかるものとし、新しい變調領域では、改めて再度その領域の最初から scan し始めるのである。

ここで、“我有幾種好板本水滸”なる文を例としてこの規則を適用してみると、段落“我有 $\nearrow 3$ ”は規則の適用を受けて、“我 $\nearrow 3$ 有 $\nearrow 3$ ”と、指定される。次の段落も同様に“幾 $\nearrow 3$ 種 $\nearrow 3$ ”となり、“好 $\nearrow 3$ 板 $\nearrow 3$ 本 $\nearrow 3$ ”は、最初の適用によつて“好板 $\nearrow 3$ ”が“好 $\nearrow 3$ 板 $\nearrow 3$ ”となるから、“好板本”は $\nearrow 3$ という形を取り、更に“板本”の部分がこの規則の適用を蒙ることによつて、“好 $\nearrow 3$ 板 $\nearrow 3$ 本 $\nearrow 3$ ”という形が生成されたことになる。以下、全く同様の操作を受けて文末に到る。また、たとえば、“兩 $\nearrow 3$ 本 $\nearrow 3$ 書 $\nearrow 3$ ”のような段落においては、

第一段階：“兩 $\nearrow 3$ 本 $\nearrow 3$ 書 $\nearrow 3$ ”

第二段階：“兩一本”書

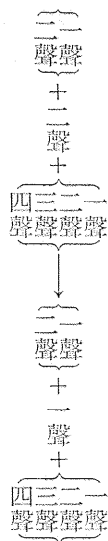
となるわけである。

要するに、基本聲調の三聲はV型の部分をその辨別的な要素として有している聲調であつて、ある環境に置かれると、その下降部分が消去されて上昇部分が強調され、他の環境にあつては、上昇部分が消去されて、その“低”なる要素が強調され緩慢な下降が残ることになる、と考えられる。つまり後の音節の falling が前の音節の falling を異化する規則であると言える。

三

さらに、普通話には、三音節連続にみられる次要な變調規則がある。これは、三音節の語又は句が、普通の會話のスピードで發話される場合に起る現象で、次のように説明されている。<sup>註⑤</sup>

すなわち、三音節の語あるいは句をABCとすると、Aが一聲または二聲で、Cが強勢を受けている音節の場合に、二聲のBは一聲に交替するのである。



(例) “三年級” ㄣㄣㄣ

“還沒來” ㄣㄣㄣ

この種の現象を變調と解釋してよいかどうかについては、實は問題がある。一般にこのような三音節連続は、第三音節が最も強く發音され、第一音節がこれに次ぎ、第二音節は最も弱く發音されるので、そのために起る現象だと解釋すると、一種の輕聲化とみることもできるからである。しかし、いわゆる“輕聲”と違つて、文法的あるいは語彙的な機能を荷つ

ておらず、また、一個の音節が隣接する音節に pitch の面で影響を与えていることは事實であらうし、“吃晩飯”の如き他の種類の音連続の場合には、このように明瞭な pitch の交替が起こることはないので、これを變調の一種と考えることに一應の道理がないわけではないと思う。

この種の變調の規則は、

規則 II  $\left[ \begin{smallmatrix} +\text{rising} \\ -\text{falling} \end{smallmatrix} \right] \longrightarrow \left[ -\text{rising} \right] / \left[ \begin{smallmatrix} +\text{rising} \\ -\text{falling} \end{smallmatrix} \right] \text{ — } \left[ +\text{stress} \right]$

αは變項であつて、その價值が+であつても、-であつてもよい。また、この規則は語または句にかかる。そこでたとえば、“三眼兒井”、“我也有”のようなものは、

三眼兒井      我也有

基底形      一聲+三聲+三聲      三聲+三聲+三聲

規則 I により      一聲+二聲+三聲      二聲+二聲+三聲

規則 II により      一聲+一聲+三聲      二聲+一聲+三聲

となる。

ここで、特に注意を要することがある。それは、もしも音節連續が、きわめて悠長なスピードで發音された時には、規則 II は適用されないかも知れないと言うことである。そうだとすれば、發話の tempo によつて、規則 II の適用を許可したり、妨害したりするような何らかのてだてを考えねばならない。發話の tempo が、聲調面における同化、異化作用に關與的であるからには、中國語の文法に、prosodic な素性の一つとして、tempo についての分類を加えることは無駄ではなからうと思う。しかしこのような觀點から tempo の辨別的な類を提示した研究は、それほど十分には行われていないようである。その他、母音や子音と言つた各分節素についての種々の音聲現象にも、tempo が關與していること

は十分に豫想されるので、それらをも含めて慎重に検討しなければならないであろうが、假りに、次のように考えることができる。すなわち、tempo x なる素性に條件づけられて、規則Ⅱの變調が起ころのであると。しかし實際上は、ある種の變調變聲が起ころうな場合の tempo は x であり、起らない場合には、y であるというように、tempo についての素性を、逆に、確定し、その素性を分類して、中國語にはどのような tempo 素性が必要かを見出して行くことになるのかも知れない。

#### 四

最後に、聲調というものの性質について、少しく私見を述べておきたい。

聲調が、音節を構成する單音（分節素）とある種の關係を持つていることはよく知られている。たとえば、中古漢語の四聲は、各々陰陽に分れる八種の調型を持つていたと思われるが、そのうち、相對的に低い pitch のものは、有聲聲母を持つ音節にのみ現われる。通時的變化を受けて、聲母の有聲と無聲の對立が消滅した時に、音聲的に確かに存在していた pitch の型が辨別性を持つようになったのである。また、pitch とその pitch を持つ音節の主母音の調音點との間に、一定の相關關係が存在する場合のあることも周知であらう。

一聲、二聲：[juw] [wi]

三聲、四聲：[jow] [we]

これらの母音は、三聲と四聲では相對的に廣いことが分かる。

一音節内で有聲性をもつ部分の基音の振動率が持續したり變化することによつて調型が決定されることを考えれば、上述のように、分節素と聲調とが全く無關係であり得ないのは、いうまでもない。

しかし、だからといって、聲調の性質を各分節素に委ねてしまうことはできない。その最も決定的な根據が、實は、變調という現象なのである。一般に、各分節素の持つ性質は、いろいろな種類の變調とは無關係なのであつて、變調は、隣



接する音節全體同士の、基本的には pitch 面での相互作用であると認めないわけにはいかない。従つて、聲調は、各々の分節素から獨立した、個々の音節の持つ素性の set として定義される。そこで、中國語のような言語では、聲調とともに音節全體を性格づけている種々のいわゆる prosodic features の働きが重要な問題となるのである。

つぎに、C.F. Hockett は聲調を contrasting contours of pitch, volume, glottalization, and length であるとしたが、聲調の音聲的特徴を、pitch の領域の面からだけではなく、長さや tempo 等の他の素性も綜合して考えれば、多大の利益があると思う。

註① William S-Y. Wang, "Phonological Features of Tone", IJAL 33.

註② 陳慧英「白婉如等」、『方言和普通話叢刊』第一本

註③ 聲調素性におけるいくつかの Redundancy convention については Wang (1967) に掲げられている。いま、普通話の聲調のパラダイムについての音韻表記及び音聲表記と Redundancy rules をここですべて掲げて置くことはできない。

註④ spectrogram 分析によると、語調としての第三聲にはあまり凹型はみられないという。

平井勝利、『第三聲の調値動態』中國語教育、第一號（一九七一）参照。

しかし、基底形を考える場合、音聲的事實と異なることがあつても、そのことによつて整合性が保たれ、記述が簡單になるようにすることは、それほど不自然ではないと思う。

註⑤ 例語と例文は、蔣維嶽、段煥先『字調和語調』（一九五七）

註⑥ 従つて、もつと完成された記述では、恐らく、或る種の規則によつて、變調過程の及ぶさまざまな領域を指定することになるだろう。

註⑦ "小姐"、"打你"のように、基本聲調三聲の連續で、先行する聲調が二聲となり、後が輕聲化しているものは、調値が〔24〕で、本來の二聲のものと、音素論的に區別される、という。

Samuel E. Martin, "Problems of hierarchy and indeterminacy in Mandarin phonology", 中央研究院歷史語言研究所集

刊二九一（一九五七）

註⑧ 趙元任『中國話的文法』（一九六八）

- 註⑥ L. M. Hartman, "The segmental phonemes of the Peiping dialect", Readings in Linguistics I; edited by M. Joos.  
註⑦ C. F. Hockett, "Peiping phonology", Readings in Linguistics.

(大學院修士課程)